

## 定例研究会報告要旨

報告者：池田 敦

### 報告テーマ

『環境教育における子どもの集団遊びについて～異年齢交流の視点から～』

近年、経済の発展に伴い、地球温暖化問題をはじめとして地球規模で環境破壊が進んでおり、環境問題の解決はいまや全世界的な課題となっている。そのような環境問題の解決を法や制度の対策だけに頼っていても根本的な解決に至ることはない。つまり、今日の環境破壊はそのほとんどが人間の経済活動など人間の手によるものであり、環境問題の解決には、人の環境に対する意識を考慮する必要がある。そこで考えうるのが環境教育である。しかし、環境教育といっても子どもが自然の大切さを学ぶということだけではなく、広義な意味合いとして子どもの教育ということになり、将来環境問題に取り組む世代づくりとして、子どもの基本的な営みである子どもの遊びに基づいた豊かな人間形成を基として考えていく必要がある。

原始古代から、遊びは人間の基本的いとなみとして存在していた。遊びに対する圧倒的多数派の道徳無関心と、少数のエリートたちの不寛容は長期にわたって共存していて、アリエスは、「17世紀・18世紀を通じてひとつの妥協が成立し、それが古い態度とは根本的に異なる、遊びに対する近代的な態度をうちたてる」と指摘した。そのときに大人と子どもの明確な区別、「子ども期」という意識が成立し、また、労働は大人の人生の中で積極的な意味をになうという新しい認識の成立によって、悪い遊びに分類されたものを子どもに禁止し、よいと認められた遊びによって「子どもの道徳性を保ち、また教育しようとする、以前には見られなかった配慮」が生まれたのである。

本報告では、子どもの遊びを現象学的観点からチクセントミハイのいう全人的に行為に没入している時に、人が感ずる包括的感覚と定義されるフロー経験であることに留意する。そして、現代社会において子どもが大人により管理され、遊びの自由が制限されている中、特に子どもの異年齢同士による遊びが行われておらず、親の理解が足りないことに問題意識をおき、親に異年齢同士の集団遊びの大切さを理解させる必要があるということをも明らかにする。

### 引用文献

- ・ M・チクセントミハイ『楽しみの社会学』今村浩明訳 思索社（1979）
- ・ 西村清和『遊びの現象学』勁草書房（1989）
- ・ アリエス『<子ども>の誕生』杉山他訳 みすず書房（1980）